

日本から見た東アジアにおける国際経済の成立

永 積 洋 子

I. 日本人の国際社会への進出

1. 16世紀の後期倭寇の時代

日本人が東シナ海の経済圏に登場するのは、16世紀後半の後期倭寇が盛んになる頃である。室町幕府がはじめた朝貢貿易は、1547年を最後に徒絶するが、朝貢貿易の時代にも遣明船の乗員による公貿易・私貿易は寧波の港、北京の会同館、帰路の北京と寧波のあいだの沿道で行われていた。

明の海禁政策は、中国人の沿岸航行にも、出発地の役人の発行した証明書の携行を義務づけ、それに違反した者は辺境地方に追放するという厳格なものだった。そこで一旦海外に渡航した人は、中国本土に帰らず、マラッカ、シャム、パタニなどに移住し、ここから中国沿岸に船をだして密貿易を行った。このような密貿易者の武装集団は「倭寇」とよばれたが、この中で日本人は10%くらいに過ぎず、のこりは浙江省、福建省出身の人たちだった。日本人も対馬、壱岐、松浦、五島、薩摩など九州沿岸の出身で、古くから中国・朝鮮と密接な関係をもつ地域の人々が大部分を占めていた。

後期倭寇の根拠地となったのは、寧波に近い舟山諸島の双嶼港である。ここには許棟、許四の兄弟がマラッカからポルトガル人を連れてきたし、また倭寇の棟梁王直が日本から博多の倭人をつれてきたので、日本人は倭寇の集団を介して、東アジア海域の取引の方法をまなび、この後の朱印船貿易の基礎が築かれたと思われる。

2. 宣教師により海外に送られた日本人

イエズス会の巡察使として来日したアレッサンドロ・ヴァリニャーノは、日本人を非常に高く評価し、日本における教会の発展のためには、日本人の聖職者を養成する必要があると説いた。そしてその教育をはじめるのは、なるべく年若い子供の方がよいと考え、18歳以上の少年のた

めのセミナリオを一つ、それ以下の少年のためのものを二つ設立した。カリキュラムは日本語とラテン語の読み書き、人文学などだった。そしてその中の優れた者をマカオのセミナリオに送った。

この時代に自ら進んで、あるいは宣教師に連れられて海外に渡った日本人がどれ位あるか明らかでないが、聖職者の養成という本来の目的にはあまり役立たなかったように見える。マカオからインドシナ半島にわたり、貿易商人として成功した和田理左衛門、マカオからマニラ移住し、現地在住の帰国希望者を募って商品を積んで帰国したが、頼まれて二人の宣教師を乗せたために、処刑された平山常陳、6年間ローマで修行をつみ、教区司祭に任命されながら、帰国後信仰を捨て、長崎奉行長谷川権六のキリシタン弾圧に協力したトマス・荒木など、宣教師やイギリス人、オランダ人の記録に記されている人たちは、それぞれ波乱に富んだ生涯を送った。これらの日本人はいずれもラテン語、ポルトガル語などを完全に読み、書き、話すことができた。

1613年にジョン・セーリスがイギリス本国から日本に派遣された最初の船グローブ号で平戸に入港したとき、スペイン語がよくできるジュアンという日本人の青年が来て、10年くらい使ってほしい、その後イギリスに行きたいと言って通訳として雇われた。彼はマニラで3年間スペイン人に使われており、その一族はほとんどすべて長崎に住んでいた。それまでは、ウィリアム・アダムズがセーリスにミゲルという通訳をつけていたので、この頃平戸、長崎には、洗礼名を持ちスペイン語、ポルトガル語のできる日本人は、かなり多数いたようである。

マカオ、マニラをはじめ、日本の朱印船がもっとも多数出入りしたインドシナ（ヴェトナム・トンキンなど）の港には、ポルトガル、スペインの宣教師が多数滞在していたが、宣教師に幼いころマカオ、マニラに送られた日本人も、その後インドシナなどに移住したと思われる。これらの日本人は、朱印船のために、日本向け商品の買い付けに当たった。その人たちは又、蘭船、唐船で自分の荷物を託送し、その代金を持ち帰ってもらい、長崎などその出身地の親類縁者と文通をつづけていた。

1633年（寛永10）のいわゆる鎖国令は、海外に5年以上在住した者、あるいは一旦帰国しながら、ふたたび海外に渡航しようとする者を死罪にすると定めている。この条項に当てはまる人は、すでに海外の生活に完全に適応し、現地で相当な暮らしをしていた人にちがいないので、この日本人の帰国についての最初の禁令は、このような外国に定住している日本人キリシタンの一時帰国を取り締まるためだったと思われる。

3. 朱印船、あるいは外国船に雇われた日本人

日本人の海外進出の例として、もっともよく知られているのは、朱印船である。朱印船の乗組員は、船の大きさにより、58名から394名までさまざまであるが、平均236名ぐらいだった。岩生成一『朱印船貿易史の研究』には、1604年から1635年までの間に出帆した朱印船は、少な

くとも 356 艘あるから、この 32 年間に延べ 84,194 人の人が朱印船で海外に渡航した、と計算されている。

朱印船には、船員のほかに客商と呼ばれる、自分の資金あるいは貨物を、運賃を払って持ち込み、船賃を払って便乗させてもらう商人も乗っていた。これらの客商を乗せたのは、日本船だけでなく、日本在住の外国人が派遣した朱印船もあった。日本在住の外国人も、日本から船を出帆させるときは、朱印状を携行する義務があったし、日本在留外国人は、ほとんどすべて日本人と結婚していたので、その妻の一族、縁者など日本人の間にそれぞれ幅広い取引関係をもっていたと思われる。

この他に外国船に雇われて出国した人々がある。たとえば 1615 年にオランダ人がインドシナのチャンパ（占城）で捕らえて、平戸に曳いてきたポルトガル船には、日本人と中国人の水夫が乗っていたし、1617 年にイギリス商館が平戸からジャワ島のバンタンに送った 2 艘の船にも、日本人 25 人を乗せていた。

オランダは 1615 年ころからポルトガル人を香料諸島から追い出し、またジャワ島の要塞を強化するため、兵士として有能な日本人を送り出すことに力を入れた。1618 年にジャカトラ（現在のジャカルタ）の要塞で使うため近隣の島から日本人を集めたところ、90 人が集まった。しかし、雇われた日本人の評判は必ずしもよくなかった。「日本人は思いのままにならなかつたり、ひどく扱われたりすると、すぐ絶望的な決心をする」からである。日本人が反抗的な態度をとるので、こういう人は排除してほしいと、オランダ東インド総督は日本の商館長に頼んでいるが、「こういう下層階級の人は陸上にいる限りまったく静かにしているので、これを選別できない」と、商館長は断わっている。日本人同志の船内での喧嘩は珍しいことではなく、ジャカトラでは日本人同志の殺人事件もあり、犯人は裁判の結果死罪とされた。また雇われた日本人は、風待ちのためオランダ船が平戸に停泊していたときの賃金を支払ってほしいと、契約の内容をめぐる、オランダ人と争ったこともあった。

平戸では 1620 年から、日本人を海外に送り出すことが難しくなってきた。先にのべたとおり、ポルトガル人が密かに、子供、少年、少女をキリシタンに改宗させ、国外に送っていることが長崎奉行などに知れたため、オランダ人も同じことをするのではないかと疑われたからである。

1621 年には、平戸のオランダ・イギリス商館長に、「日本人は雇い入れた者であれ、買った者であれ、将軍の朱印状を持たずにオランダ船、イギリス船、唐船で送り出すことを禁止する」との命令が伝達された。この命令はポルトガル人がオランダ人の海賊行為を告発したために出されたものであるが、「これはポルトガル人にたいする好意からではなく、日本の庶民を外国での競争の危険にさらしたくないために出されたのである」と、オランダ商館長は解釈している。幕府は海外での日本人の紛争にかかわることを極度に警戒していた。日本人を支援して、その争いに敗れることがあれば、将軍の名誉にかかわるからである。この日本人売買禁止令が出された後、

日本人を買ったり、海外に送るために雇い入れることは、ほとんどなくなった。

次に日本人の海外進出とほとんど同時に東アジアで広く流通するようになった日本の銀について見たい。

II. 日本の銀のアジア市場への登場

16世紀に日本から朝鮮に「日本国使臣」が派遣されていたが、1523年ころから、使節は外交より、貿易を目的とするようになった。この頃日本から朝鮮に輸出していたのは、銅と硫黄で、朝鮮から木綿を買っていた。

16世紀の中期から大量の銀が朝鮮に送られるようになった。それは、1526年に博多商人神屋寿禎が石見（島根県）の大森銀山を発見したこと、さらに1533年に寿禎が朝鮮半島から灰吹法とよばれる銀の精錬技術を石見銀山に導入し、この技術が定着したためである。それまでは、銀鉱石をそのまま博多にはこび、朝鮮で精錬していたと思われるので、朝鮮からの技術導入により、銀の生産は急増した。そしてこの銀は朝鮮から中国に流出した。16世紀後半に、日本はアジアでもっとも多くの銀を産出する国となった。

ポルトガル人メンデス・ピントの『東洋遍歴記』には、1542年に中国船が日本で銀を買い付けて、平戸から漳州に運ぶ途中、イスラムの海賊に銀を奪われるが、さらにこれをポルトガル人の海賊に取られる話がある。当時の東シナ海を航行する船は多様であり、日本の銀が海賊たちの略奪の標的とされていたことを象徴するような事件である。

日本の銀はこのようにして、アジアの市場に現れ、日本は「銀の島」として知られるようになった。「スペイン人は日本を銀の島と名付け、日本には無数の銀山があり、銀の他には何も輸出する品物はない」と、教会の記録に記されている。またオランダ人リンスホーテンの『東方案内記』にも、日本にはいくつかの銀山があり、ポルトガル人がその銀を中国に運んで、日本人が必要とする絹その他の品物と交換する、と記されている。本書はリンスホーテンがインドに駐在するポルトガルの大司教の秘書として、5年間ゴアに滞在した間に、インドおよびアジアの各地と往来し、現地の事情に詳しいインド人、ポルトガル人から聞いた話を、さらに文献で補って記したもので、東洋のポルトガル貿易の中でもっとも利益のあるのは、マカオから中国産の生糸を長崎にはこび、そこから日本の銀を持ち帰る生糸貿易にあることを、オランダ人は当初から熟知していたのである。

ポルトガル人が16世紀末に日本から送り出した銀について、グランは、当時の商人あるいは宣教師の記録により、次のような一覧表を作成している。

この表1の銀高は、クルサードまたはデュカットで記されている。この二つの貨幣のテールとの交換率は年により細かく変動しているが、ここではクルサード＝デュカットとして、重量に換

表1 日本から輸出された銀高一覧表

年次	出典	銀高	重量キロ
ca. 1583-91	フィッチ	600,000	15,336
ca. 1583-87	リンスホーテン	150~200,000	3,834~5,112
1585	ルイス・フロイス	500,000	12,780
1593	ヴァリニャーノ	500,000	12,780

算してある。またフィッチの記録の数値を重量への換算も、研究者により 50 万キロから 149 万キロまで、まちまちである。グランはこれらの数値と、フィリピン経由で中国に輸入された新大陸の銀、インド洋または中央アジア経由で中国にもたらされた銀、の双方を考え合わせて、16 世紀後半に中国には 46,600 キロの銀が輸入されたが、その中約 60% は日本産の銀だったと推計している。そしてデータの欠陥、密貿易者により中国にもたらされた銀の史料がないことから、この数字は最低の数値であるとしている。

グランはまた、1604 年からポルトガル貿易が終結する 1639 年までの日本貿易の推計表（表 2）を作成している。この中で最後の項目の銀輸出高（重量キロ）は、全輸出高の 80% は銀であると仮定して計算したものである。

朱印船の渡航は、1635 年に完全に止むので、この表で見ると朱印船は一時期には外国貿易の中で大きな比重を占めていたことがわかる。それに反して中国船は、この時期には長崎・平戸だけではなく、薩摩など九州の各地に来航しているので、この表はほとんどその実態を把握していないと思われる。一方、ポルトガル船の数値は、実像にかなり近いと思われるが、ポルトガル人が日本から持ち出している銀の大部分は、博多や長崎の富裕な商人たちが、「投銀」とよばれる高金利で貸付けた資金である。その利率は 1 航海につき 35~48% で、船が遭難したり、海賊に襲撃された場合は、返済の義務はなかった。1620 年代には、博多出身の長崎代官末次平蔵を筆頭として、長崎の商人も多数ポルトガル船に投資していた。オランダ船の比率が著しく少ないのは、第一に 1620 年まではオランダ商館の帳簿が不備で、史料が少ないこと、第二に 1620 年代には、オランダ人は東シナ海ではまだ海賊の時代で、中国商品の安定した仕入港をもたなかったこと、第三に台湾貿易をめぐる末次平蔵との紛争から、1627~33 年の間は貿易が中断したこと

表2 日本貿易の推計表（1604~1639）

運搬船	輸入額 (貫目)	輸入品銀高 (重量キロ)	銀輸出高 (重量キロ)
朱印船	298,000	1,053,750	843,000
ポルトガル船	216,900	813,375	650,700
中国船	114,620	429,825	343,860
オランダ船	76,332	286,245	228,996
合計	705,852	2,583,195	2,066,556

があげられる。オランダの貿易額が急上昇するのは、朱印船の渡航が止み、東シナ海の海賊の間の覇権争いが一段落して、鄭芝龍、鄭成功の父子が中国本土から台湾への生糸・絹織物の供給に協力するようになった1630年代後半からである。

日本の銀を厳しく選別し、銀の種類ごとに当時アジアでもっとも広く流通していたスペインのレアル貨との交換率を定めていたのは、中国人である。1618年に平戸のオランダ商館は、唐船を襲撃して奪った大量のソマ銀、ベルフ銀、丁銀などを香料諸島に送ったが、商館長はこれらの銀が現地の中国人に気に入るかどうかと心配している。これまで、ジャワ島のバンテンでは、日本のソマ銀はレアル貨の5%増し、ベルフ銀は3%増し、丁銀（日本国内の流通銀）はレアル貨と同じとされていた。マカオ、マニラ、交趾シナの商人たちも、中国人に満足される銀を入手するために、大変苦労している、とオランダ人は書いている。これらの記述から、17世紀初期にはアジア各地にさまざまな日本銀が出回り、中国人はこれの子細に選別し、種別ごとに換算する相場が立っていたことがわかる。

長崎には中国人の三官という銀吹屋がおり、丁銀を吹きかえて（精錬し直して）純度の高い灰吹銀（ソマ銀、ベルフ銀など）としていた。1630年にオランダ人は長崎で三官の家に招待されて、その豪華な生活に目を見張っているが、三官は武器を輸出していると密告され、それに連座して日本人14人をふくめて、39人が死罪となった。

幕府は丁銀を灰吹銀に精錬し直して輸出することを厳しく取り締まったので、1635年以後もっぱら丁銀が輸出されるようになった。そこでオランダ商館は、経験豊かな人に丁銀の鑑定を依頼した。鑑定人は偽物、粗悪品を選別し、また古いものと新しいものを区別して、それぞれOとNのイニシャルを記した箱に入れたが、古いものの方が純度が高いとされた。

オランダの日本貿易額がもっとも多かったのは、ポルトガル船の来航禁止直後の1640年である。しかしこの後、気候不順による凶作のため大飢饉となり、また奢侈禁止令により大名や富裕な商人たちの絹・絹織物の需要は抑制されたので、ポルトガル貿易断絶を予想して大量の輸入品を買い込んでいた大商人が多数倒産した。この中には、平戸時代を通じてオランダ商館と多額の取引をしていた商人も何人かいた。

1668年に、幕府は銀輸出禁止令をだした。いわゆる鎖国後にも、オランダと中国を合わせた貿易の総額は、それ以前とあまり変わらなかったからである。オランダは日本から輸出する小判をインドのベンガルやコロマンデルに送り、かなりの利益をあげることが出来たので、この輸出禁止令を受け入れた。しかし、中国人はこれに抗議したので、僅か一年で中国船にふたたび銀の輸出が許可されることになった。

この後日本から流出する金銀を減らすため、貿易制度が度々改正されるが、中国船にたいしてはあまり効果がなかったように見える。1661年、鄭成功は台湾のオランダ要塞を攻撃してオランダ人を降伏させ、台湾から追放するが、1683年には清が台湾を領有することになる。海禁令

を一層徹底した遷海令が撤廃されるとともに、長崎に来航する中国船は急増し、17世紀末には、中国貿易はオランダ貿易の2倍に達することになる。

このように見てくると、東アジアの国際経済を支配していたのは、中国人のネットワークで、ここに進出した日本人はもとより、ヨーロッパ人もこれには全く競争できなかったことは明らかである。ただ中国人の日本貿易については、16、17世紀にはその数量を記した史料はほとんどなく、18世紀以降もお断片的な記録があるにすぎない。しかもこれらは長崎会所に届けられた公式な数量を通詞に頼んで教えてもらったにすぎず、水面下にどれだけの私貿易があったのか、見当もつかない。オランダ史料から中国貿易を眺めると、常に隔靴搔痒の思いをするのである。

《文献目録》

村井章介『国境を超えて—東アジア海域世界の中世』校倉書房、1997年

永積洋子「17世紀中期の日本・トンキン貿易について」『城西大学大学院研究年報』第8号、1992年3月、21～46頁。

永積洋子「平戸商館はオランダの戦略拠点か」中村質編『鎖国と国際関係』吉川弘文館、1997年、186～208頁。

永積洋子「平戸に伝達された日本人売買・武器輸出禁止令」『日本歴史』1999年4月号、67～81頁。

Glahn, Richard von, *Fountain of Fortune, Money and Monetary Policy in China, 1000-1700*. Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press, 1996.

(教授)